

石塚1号墳現地説明会資料



平成21年7月18日

佐賀市教育委員会

これまでの経緯

石塚古墳は昭和63年に圃場整備に伴って発掘調査が実施された。そのとき、挂甲^{けいこう}（鉄製のよろいの胴部）や金銅製馬具^{ばぐ}など多数の副葬品が発見され、また、標高3m程の低平地にある古墳ということで大きな注目を集めた。

その重要性が高く評価され、平成8年には出土した遺物が県の重要文化財に指定されたが、古墳自体は史跡指定を受けず、現在まで埋め戻されて保存されてきた。

平成21年度に古墳の整備や指定に必要な情報を得るために再度発掘調査を実施した。

石塚1号墳の現状

石塚1号墳は非常に残存状況が悪く、盛り土部分はほとんど消滅。さらに石室も最下段の石積みしか残っておらず、南側も消滅しています。

よって古墳の規模、石室の規模について、詳細は不明。また古墳の周りに掘られている「周溝」も消滅しているので、平面形態も不明。

石塚1号墳の特徴

立地条件

標高3m前後の低平地に造られている。このような軟弱地盤に作られた古墳は少ない。筑後川を行来する船から良く見える場所を選び、筑後川河口を眺める地点でもあるので、河川交通を掌握した豪族^{ごうぞく}の古墳だったのであろう。

石室

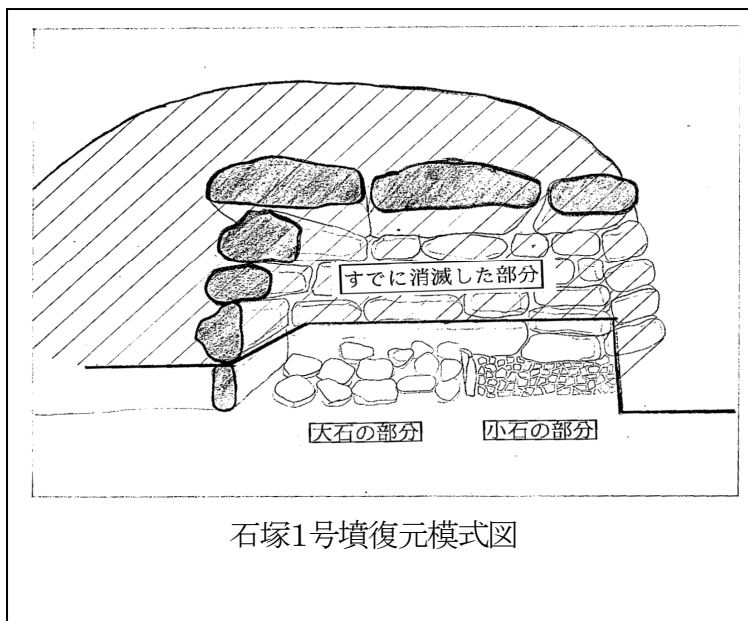
現存する石室の規模は全長3.0m、幅1.2mです。現段階では入り口部分は東側になると考えられる。

床面には砕石を敷き並べ、その後、人の頭ほどの大きさの石を並べ、高まりを造っています。この部分に棺を安置したと考えられる。

一般的に石室は玄室と呼ばれる棺を埋葬するための部屋と羨道と呼ばれる通路部分に分かれる。玄室と羨道の境には棒状の石を埋め込んで、さらに両脇に石を門のように立て、入り口を狭めています。

石塚1号墳では下図の大石部分と小石部分を合わせたところが玄室で、羨道部はなくなっている可能性がある。

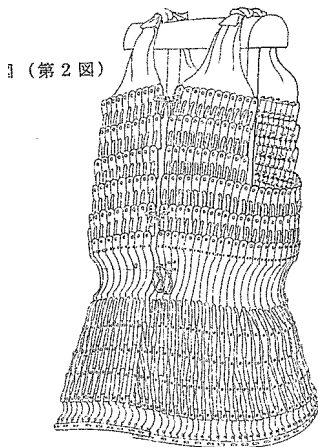
あるいは大石部分が玄室で、小石部分が羨道、その境界は板石を立てるだけの簡単な仕切りを作ったという説もある。こういう構造は朝鮮半島の新羅にしばしば見られるので、その影響を受けている可能性もある。



また、軟弱地盤に石室という重量物を構築するために、構築予定地の土を入れ替え、つき固め、石室が傾かないように基礎工事を行っている。

遺物 挂甲

挂甲とはけいこう小さな鉄板をかわひも革紐などで綴じて造ったけいこう鎧のことで、通常かわひも革紐が腐りばらばらに散らばった状態で遺跡からは出土するが、石塚1号墳ではばらばらになる前に、錆びてくっついていたために、全体の形がわかる状態で出土した。非常に珍しいことである。



挂甲復元図



石塚1号墳出土挂甲

遺物 馬具

馬具とはくつわ轡など馬を操るための道具に加え、装飾性を高めるためにぎょよう つじかなぐ杏葉や辻金具といったさまざまなもの付属していた。これらの馬具は、鉄板を銅板で包み、さらに金めっきを施したものである。

当時の支配者たちは、金の馬具で飾られた馬に乗って権力を誇示したと考えられる。

遺物 金銅製円形板

用途は不明だが、円形の銅板に金めっきした装飾品が見つまっている。この板には

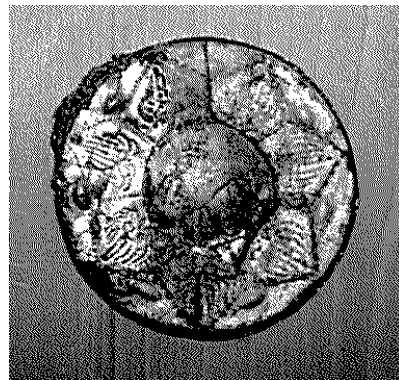
れんげもん
蓮華文が彫られている。

れんげもん
蓮華文というのは仏教に関連して使われることが多い文様で、現在、日本で最古の

れんげもん 蓮華文が施された製品というのは590年代に作られたならけんあすかであら奈良県飛鳥寺の瓦である。石塚1号墳から出土した遺物の年代が、6世紀末から7世紀初めと考えられているので、飛鳥寺の瓦と同年代か、もしくはそれよりも古くなる可能性が指摘されている。



金銅製円形板その1



金銅製円形板その2

石塚古墳の意義

石塚1号墳は6世紀中ごろに作られ、6世紀末から7世紀初めにかけて大規模な改修が行われたようである。また広い地域との交流がうかがわれるような豪華な副葬品を持ち、筑後川を往来する船から見えるような位置に造られているところから、筑後川河口一帯を掌握していた豪族の墓ではないかと思われる。

筑後川から見えるという立地条件にこだわったために、